

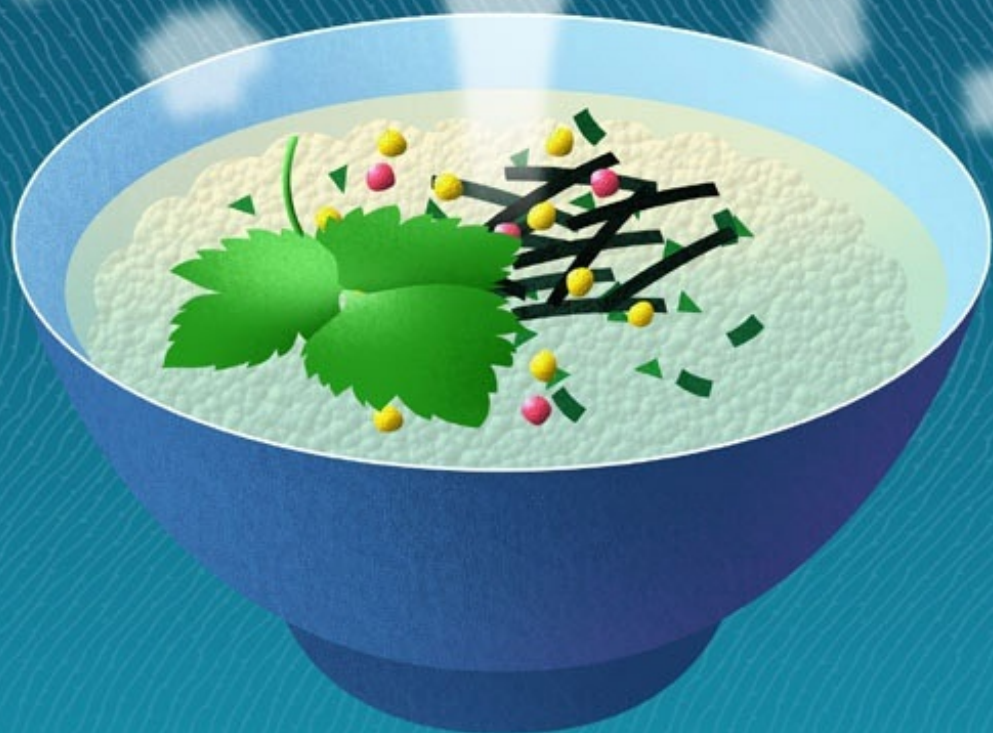
よもぎばあさんの

よう かい ちゃ づ

# 妖怪茶漬け

2

ぎゃく  
逆ページ版



作 そのやまがりん 絵 さこやん

ここは最後の  
ページじゃよ。  
順番を逆に  
並べてあるから、  
反対側のページから  
読んでおくれ。





欲よくに目めがくらんだ人間にんげんほど、心こころにすき間まができるもんじゃ。

妖怪ようかいたちは、そのすき間まを ちゃんと分わかって入りこんでくるんじゃ。

おぬしは大丈夫だいじょうぶか？ 何なんでも欲張よくばって 独り占ひとじめにしとったら、

妖怪ようかいがすぐに やってくるぞっ！



さあ、今こん回は 今こんまでじゃよ。

また 妖怪話ようかいばなしを聞きたくなくなったら、

いつでも 遊あそびに来ていいぞ。

とびっきりの妖怪茶漬ようかいちやくけを

用意よういして、待まってあるからの。

ほっほっほっほっ。

商人と夫が言い合っている わずかな すきをついて、  
嫁は なんとか 我が子を取り返して、船の奥へ逃げたんじゃ。

そして、夫がすぐに追いかけてようとした時じゃ。  
突然船が大きく傾いて、商人の積み荷が すべり出して、  
海に落ちそうになったんじゃ。

商人は 大慌てで 荷物を止めようとする。

持った小判が 手からこぼれても、荷物のほうが大事じゃったんじゃ。

夫のほうはというと、散らばった小判の音で 振り返り、

それを必死に ひろおうとする。すると船がもつと傾いての、

はずみで、儲けばかり気にしておった商人と、目先のお金に夢中になつた夫は、  
荷物もろとも、海へ放り出されてしもうたんじゃよ。

とたんに、海坊主の姿は消え、大荒れだった海は静かになつたんじゃ。

その後 商人と夫は、海の中に 沈んだまま、

二度と浮き上がって こなかつたということじゃ。

商人は、もうお金は無かったもんじやから、

「荷物を届けたら大金が入る。」

その一部をお前にやる」

というたんじやが、

夫はもっとよこせと、

首を たてにふらなかつた。



海坊主は船先をしつかりつかんであるものじゃから、逃げようにも逃げられん。船頭と客たちは、しかたなく、海に身を投げる者なくして決めることにしたんじゃが…、

外れを引いたのは、金持ちの商人じゃったんじゃ。

慌てた商人は、側にいた赤ん坊を抱いた夫婦に向かつての、

「そ、その赤子を私にくれ！ 金はいくらでも出す！」

と、ふところから小判の束を取り出したんじゃ。赤ん坊をお金で買って、自分の代わりに、海に投げ捨てようと考えたんじゃよ。

大事な我が子じゃから、嫁のほうはもちろん固く断った。ところがじゃ、

その夫というのが、実は、お金をかける遊びで負けて、借金を作ってあってな、借金取りから逃げて、船に乗り込んでおったんじゃよ。

「もっと金を出したら、この子はくれてやる！」

お金に目がくらんだ夫は、そういうて、嫌がる嫁から

赤ん坊を無理矢理取り上げたんじゃ。

急に<sup>きゆう</sup>天気が悪<sup>わる</sup>くな<sup>な</sup>ってき<sup>き</sup>たも<sup>も</sup>んで、

船頭<sup>せんどう</sup>が 船<sup>ふね</sup>を出<sup>だ</sup>すのを止<sup>や</sup>めよう<sup>よう</sup>とし<sup>し</sup>たん<sup>ん</sup>じゃ。

そしたら、客<sup>きやく</sup>の一人<sup>ひとり</sup>じゃ<sup>つ</sup>た金持<sup>かねも</sup>ちの商人<sup>しょうにん</sup>が、

「急ぎ<sup>いそ</sup>の荷物<sup>にもつ</sup>がある。金<sup>かね</sup>はいくら<sup>くら</sup>でも出<sup>だ</sup>すから、

す<sup>す</sup>ぐに船<sup>ふね</sup>を出<sup>だ</sup>してく<sup>く</sup>れ」

そ<sup>そ</sup>うい<sup>い</sup>うて、倍<sup>ばい</sup>の運賃<sup>うんちん</sup>を渡<sup>わた</sup>した<sup>ん</sup>じゃ。

船頭<sup>せんどう</sup>は少<sup>すこ</sup>し迷<sup>まよ</sup>うた<sup>が</sup>、運賃<sup>うんちん</sup>をはず<sup>ず</sup>んで も<sup>も</sup>ろ<sup>ろ</sup>うた<sup>し</sup>、

波<sup>なみ</sup>もそれ<sup>それ</sup>ほど荒<sup>あ</sup>れては 他<sup>ほか</sup>の客<sup>きやく</sup>にも 了<sup>りよう</sup>解<sup>かい</sup>して<sup>も</sup>ろ<sup>ろ</sup>うて

船<sup>ふね</sup>を出<sup>だ</sup>すこと<sup>こと</sup>にし<sup>し</sup>たん<sup>ん</sup>じゃ。

と<sup>と</sup>ころ<sup>ろ</sup>が<sup>が</sup>し<sup>し</sup>ゃ、沖<sup>おき</sup>に出<sup>で</sup>た<sup>と</sup>たん、海<sup>うみ</sup>が荒<sup>あ</sup>れ出<sup>だ</sup>した<sup>か</sup>と思<sup>おも</sup>うと、

大波<sup>おおなみ</sup>の裏<sup>うら</sup>から 山<sup>やま</sup>のよ<sup>よ</sup>うな海坊主<sup>うみぼうず</sup>が現<sup>あら</sup>わ

「一人<sup>ひとり</sup>だけ海<sup>うみ</sup>に身<sup>み</sup>を投<sup>な</sup>げ<sup>る</sup>。そ<sup>そ</sup>したら他<sup>ほか</sup>の者<sup>もの</sup>は助<sup>たす</sup>けて<sup>や</sup>る」

と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>う<sup>ん</sup>た<sup>ん</sup>じ<sup>ゃ</sup>。



むかしむかしのことじゃ。  
十人ほどの客を乗せた船が、  
港から出ようとした時じゃった。



さて、わしが知つとる  
海坊主うみぼうずの話はなしに、  
こんなものがあるんじやが…、





よんはいめ  
四杯目●波の裏からヌーツ

海坊主  
(うみぼうず)



船乗りたちに、一番恐れられている妖怪が、海坊主じゃ。

こいつはの、世界中、どこの海にも現れる妖怪での、多くの船乗りたちが、航海の途中に、とても恐ろしい目に、あつておるんじゃ。

海坊主が現れる時は、それまで静かじゃった海が、

突然、台風の時のように、大荒れになつての、嵐に巻き込まれた船が、波にのまれぬように、必死でカジをとつておると、

大きな海坊主が、目玉だけを光らせて、

波の間から、ヌーツと現れるんじゃ。そして、その船が

何百人も乗れるくらいの、大きな船でも、

あつというまに、ひっくりかえしてしまうんじゃ。

ぬけ首くびということ を わかっておるといふことなんじゃ。

おぬしも もし、山やまの中なかで やさしそうな人間にんげんに出会でうたら、じゅうぶん  
気きをつけたほうがいいぞ！ その人間にんげんが本当ほんとうの人間にんげんか、それとも、

ぬけ首くびが人間にんげんのふりをしておるのかは、

おぬしが 眠ねむり込んで しまわないかぎり、

分わかりは せんのだじゃからのう。

ほう、おぬし、山やまの中なかに 入はいらぬから だいじょうぶ…

と、安心あんしんしとるのか？ それは ちよっと早はやいぞ。

ぬけ首くびたちは、ときどき

山やまから降おりてくること が あるのだじゃ。

真夜中まよなかに、ブーン…ブーン…と、

虫むしの 羽はばたくような音おとが 聞きこえてきたら、

それはきつと、腹はらをすかせた ぬけ首くびたちが、

飛とびまわつとる音おとに まちがないのだじゃから。ほっほっほっほっ。



旅人をもっと安心させるための、

ぬけ首たちは わざと先に眠ったふりを

するんじゃ。やがて 旅人が つられて

眠り始めたたん、ぬけ首たちの首が、

体からスッポリぬけての、

耳を つばさみたいに動かして 空中を

飛びまわったかと思うたら、くるりと向きをかえて、

いっせいに 旅人の体に 食らいつくのじゃ。

いつもは、虫や野ネズミなんかを

食うて おるもんじゃから、久しぶりの人間の肉は、

ぬけ首には たいそうな ごちそうなんじゃよ。

ろくろ首の なかまにはちがいないが、ろくろ首と

決定的にちがうのは、人を食う恐ろしい妖怪じゃということと、

人間の姿であるときも、自分たちが

人里はなれた山の中に

ひそんでおつての、

旅人が 迷いこんでくるのを

待つておるんじや。

それでの、

めあての旅人を見つけると、

ぬけ首たちは いかにも

やさしい人間のふりをして、うまいぐあいにウソをついての、

自分たちが すみかに しとる山小屋に、旅人を招き入れるんじやよ。

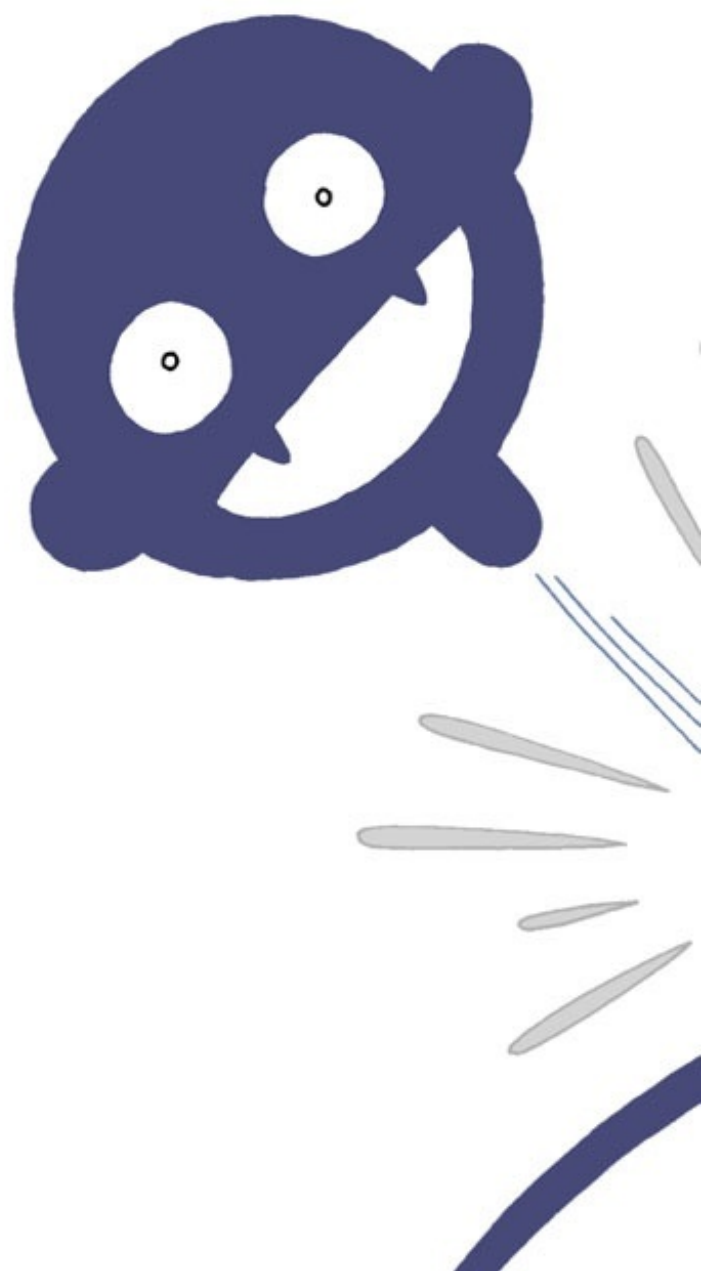
ぬけ首たちも、ふだんは ふつうの人間の姿をしとるし、旅人は、まさか

そこが化け物のすみかじゃとは 夢にも思わん。おまけに、たいそうな

もてなしを受けるものじゃから、すっかり安心しきって、

山小屋に一晩泊めてもらうことに なるわけじや。

しかしの、ぬけ首たちの ほんとうのねらいは、旅人を食うことなんじやよ。



ろくろ首は 人間には 危害を加えるようなことは しないのじゃが、  
蛇嫌いの人間が、この妖怪を見たら、きつと生きた心地が せんじやるうのう…。

まったく ろくろ首というのは おかしな妖怪じゃ。  
ん?…、そんな妖怪は、ちつとも怖くないと 思っておるのか?

ほっほっほっほっ、安心するのは まだ早いぞ。

ろくろ首には、『ぬけ首』とか

『飛頭蛮』というて、

首が体からスッポリぬけて、

頭だけで 空中を

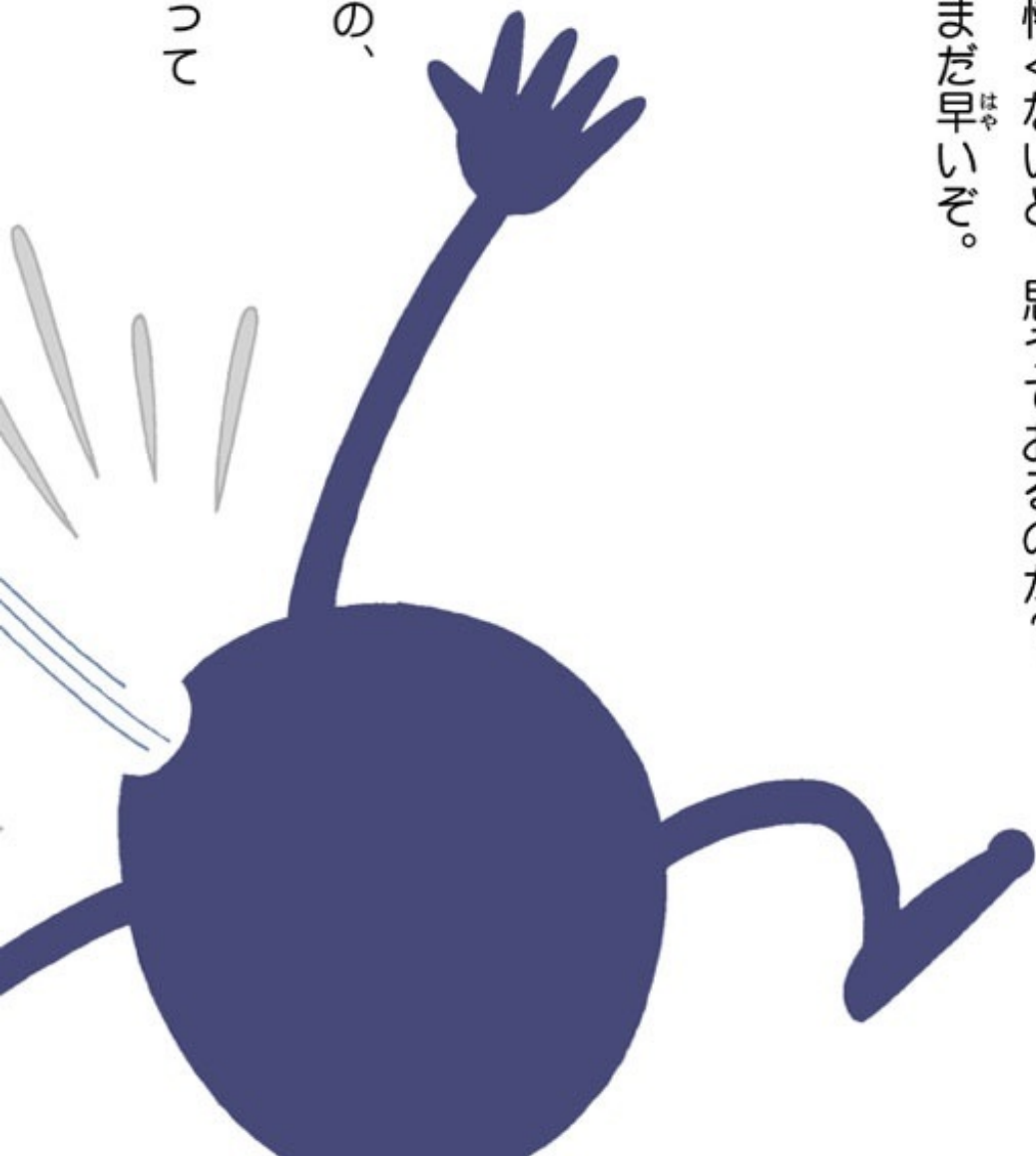
飛びまわる種類のものが

あるんじゃが、こいつらは、

首がのびる ろくろ首とは 大違いの、

とても恐ろしい妖怪なんじゃよ。

たいていは 四、五匹で群れをつくって







ようやく体が動くようになった夫は、嫁を起こさんように 外に飛び出すと、急いで近くの寺に かけこんで、坊さんに 助けを求めたんじゃ。

しかしの、ふるえる声で、さっきの出来事を 説明した夫に、

坊さんは、おどろいたようすもみせず、静かに こう言うたんじゃ。

「それはな、ろくろ首というて、寝ている時に首が伸びるほかは、普通の人間と変わりはない。

本人は、起きてる時には、何も おぼえておらんはずじゃ。

だがな、そのことを口にしないほうが おぬしのためじゃぞ。

おぬしさえ 黙っとけば、今までどおり 幸せに暮らせるのじゃから。

気にしないようになるまで、しんぼうすることじゃ」

夫は ずいぶん悩んだ末に、結局何も 見なかつたことにしたんじゃよ。

このように ろくろ首はの、起きとる時は普通の人間での、寝とる時に首が伸びるんじゃが、人間の時も、ろくろ首になつとる時も、自分が ろくろ首だ

ということに、まったく 気がついておらんのじゃ。



もう 夫は たいそう おどろいてのう。

恐ろしさのあまり、体が石のように

固まってしもうて、声も 出すことが

できんじやった。

やがて嫁の首は、頭が天井に つつかえるまで

のびきると、しばらくの間、ゆらゆらと

不気味に ゆれておったんじやが、

体が ごろりと寝返りをうつと、

のびる時とは 正反对で、首は ものすごい速さで ちぢんで、

あつというまに 元の姿に もどったんじやよ。

嫁は 何ごともなかったかのよう、また静かな寝息を たてとるもんで、

夫は、これはきつと悪い夢でも 見たのじやと、

自分に いいきかせようとしたんじやが、嫁の頭が つつかえたところは、

昨日と同じように、板が ずれておったんじや。

よく見ると、けむりのようなもんは、となりで寝ておった嫁の  
胸元あたりから、ふきだしておったんじゃよ。

おどろいて、目を まんまるにして 嫁の寝姿を

見ていた夫はの、目をこらして、もう一回

よく見直したんじゃが、ほんとうに おどろいたのは、

その次の できごとじゃった。

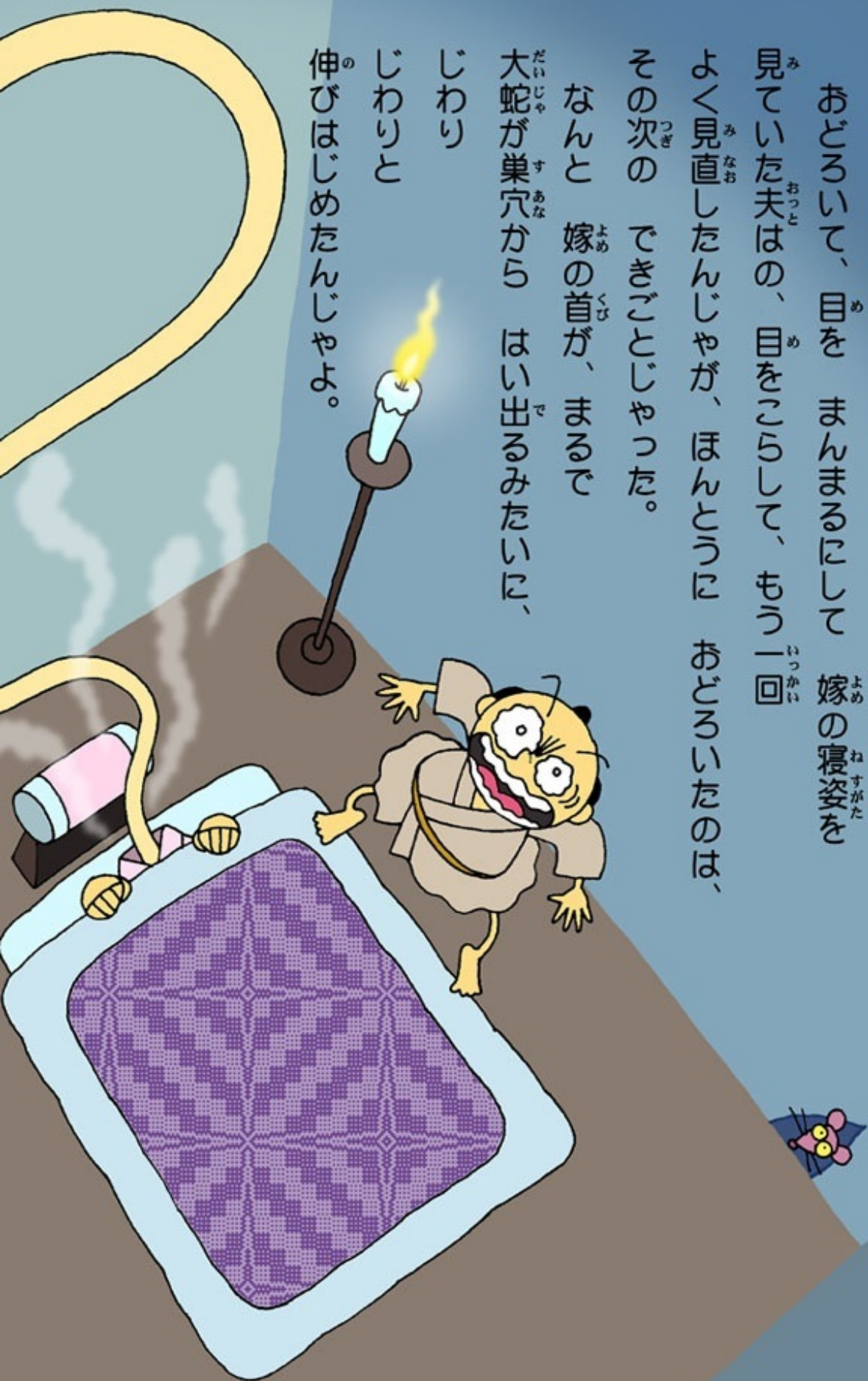
なんと 嫁の首が、まるで

大蛇が巣穴から はい出るみたいに、

じわり

じわりと

伸びはじめたんじゃよ。



「たぶん、大きなネズミのせいじゃろう」

と思うて、たいして 気には しなかつたんじゃよ。

ところがじゃ。

次の朝も、その次の朝も、元にもどしたはずの天井板が、やっぱり同じように

ずれておつてのう。何やら 胸さわぎが するというて、嫁が たいそう

不安がるものじゃから、三日目の夜にの、夫は 寝ずの番：つまり、一晩中

起きておつて 見はりをするこなんじゃが： その寝ずの番をして、

原因を確かめることに したんじゃ。

そうして夜がふけ、やがて 不安がっておつた嫁が 寝静まった頃のことじゃ。

夫は嫁の横にすわつて、目をこらして 天井を ずっと見張つておつたんじゃが、

突然、けむりのような、霧のような、なんだかもこもこしたもんが

部屋の中に わき出してきたんじゃ。

天井板を ずらした 犯人が、いよいよ あらわれたと思うて、

夫は 棒きれを 手にとって身がまえたんじゃが、



三杯目●知らぬがほつとけ！

ろくろく首 (ろくろくび)



これはな、江戸時代の ある若い夫婦の話じゃ。ふたりは 近所でも

ひょうばんの 仲のいい夫婦でう。それまでは とても幸せに

暮らしたたんじゃが…、事の起こりは ある朝から始まったんじゃ。

嫁が朝めしの したくをしようと、夫より一足先に目をさました時にの、

ふと、天井の板の一枚が ずれておるのに 気付いたんじゃ。

どろぼうに 入られたんじゃなかるうかと 不安に思うて、すぐに夫を

起こしたんじゃが、夫が 家の すみずみまで しらべてみても、

へつに とられたもんは 何もありません。

「はて…、ふしぎなことが あるものじゃ」

そういうて 首を かしげながら天井板を 元にもどした 夫じゃったが、

ほい、よもぎばあさんじゃよ。

また、妖怪話を聞きに来たのかい？

それじゃあ さっそく、

お茶漬でも ごちそうしようかの。

ろくろ首味、海坊主味、

とびっきりのを 用意してあるから、

たっぷりと 味わえるぞ。

では、始めようかの。

食べながら、耳をかたむけておくれ。

ほっほっほっ。

